

■■■第5章：ミトラ教と日本のつながり

●「ミトラ教」は、「ミトラス教」（古代ローマ帝国）、「明教」（中国）、「マニ教」（摩尼教／中央アジア・中国）、「ズルワーン教」（ペルシア）、「ボゴミール派」（東欧）、「カタリ派」（フランス）などとも呼ばれる。

ボゴミール派やカタリ派をキリスト教の一部とみなし、その異端とする考え方は古い見方で、最近の宗教学では修正され、もともと思想も系譜も異なる東方オリエント系の宗教のキリスト教世界への伝播と考えられるようになってきている。

●「ミトラ神」は、キリスト教徒にとっては「キリスト」そのもので、ユダヤ教徒にとっては「大天使メタトロン」であり、イスラム教徒によっては「イマム・マーディ」、ヒンドゥー教徒によっては「カルキ神」、または「クリシュナ」の再臨とされている。神智学では、ミトラ神のことを「ブラフマー」あるいは「ロゴス」と呼び、その地球上での姿を「世界教師」と呼んでいる。

「ミトラ」という名前は、サンスクリット語で「マイトレーヤ」と転訛し、インドやチベットなどではマイトレーヤと呼ばれている。一方、イラン系ミトラ＝ミスラがミフルと転訛。続いてミクル→ミルクル→ミルクとなり、最終的に「ミロク」と呼ばれる。このミロクが漢字に翻訳されて「弥勒」となり、マイトレーヤの訳語となる。これが「弥勒菩薩」である。弥勒菩薩は仏教におけるメシアである。

このように、世界中の主要な宗教の中にミトラの像が組み込まれている。



広隆寺の弥勒菩薩像。
国宝第一号に指定されている。

●ミトラ信仰は、中央アジアから中国・古代朝鮮を經由して日本にも伝えられ、弥勒信仰の中に生きている。日本において弥勒信仰は、そのまま仏教だった。当時、いち早く仏教を取り入れようとしたのは、蘇我氏であった。彼らは仏教を政治的に利用して、古代日本の支配権を手に入れた。

その際、蘇我氏がバックにつけたのが仏教を持ってきた渡来人たちであった。なかでも、最大の力を誇っていたのが「漢氏（あやし）」なる一族だった。漢氏は、ペルシア系渡来人で、仏教のほか奇妙な信仰を持っていた。それは、漢氏にちなんで「漢神信仰」と呼ばれたが、その中心は雄牛を殺す儀式にあった。この儀式はミトラ教の密儀に通じている。

●12世紀以降の中央アジアと中国では、東方ミトラ教ミーフリーヤ派（弥勒派）が活発な活動をし、彼らから朱子は東方ミトラ教を学び「朱子学」を興した（12世紀）。さらに王陽明が「陽明学」を築いた（15世紀）。東方ミトラ教は別名を「明教」というが、中国では明（1368～1644）という王朝名の由来となった。

朱子学と陽明学は東洋版神智学の双壁である。日本では江戸時代に林羅山、三浦梅園らが「日本朱子学」を興隆させ、中江藤樹らが陽明学を興隆させ、伊藤仁斎らが「古学」を起こし、荻生徂徠が「徂徠学」を起こし、本居宣長らが「国学」を起こした。

●「神智学」はマダム・ブラバッキーやルドルフ・シュタイナーの十八番と思われがちだが、そうではない。東方神智学的な認識は、日本の朱子学や陽明学、徂徠学、国学などのいわば日本版神智学と極めて類似した思考パターンを示している。国学＝日本版神智学と考えたほうが正解である。

なお、20世紀初頭、インドの巨星タゴールの詩集をいち早く翻訳した功勞でも知られる三浦関造氏が、ブラバッキーの『靈智学解説』を翻訳出版したが、この本が日本における神智学資料の草分け的存在になり、現在、三浦関造氏は日本神智学の祖とされている。

[「ヘブライの館」](#)